

## Making of cover page "VISION"

名古屋大学 環境医学研究所 宇宙医学実験センター 古賀 一男

### 1. はじめに

表紙のデザインをお手伝いしたくらいで、以下に述べるような多言を労するのは少し気が引けるのですが、無理に割いていただいたスペースですので、作者からの製作意図などについて、出来るだけ客観的に述べさせていただきますと思います。概要については先号の編集後記に鶴飼先生に取り上げていただきましたので、ここでは making of cover page VISION というようなことで製作過程を明らかにしてみたいと思います。ここに述べるプロセスはとても自然科学的と言えるものではありませんが、出来る限り整理して述べて見ます。

### 2. 題字と書体

製作ノートを参照しながら、途中で試作した材料の一部を用いて製作過程を簡単に辿ってみます。最初に VISION の表紙のデザインをしてみようと考えた時の意図についてのメモが残っていますが、そこには次のように書かれていました。1) VISION という雑誌にふさわしい品格を持つことを第一義とする、2) VISION にふさわしい内容を示すデザインとする、3) 書架におかれている時、遠くから見ると明確な眼の図像が確認できて、視覚に関係が深い雑誌であることが一目でわかること、4) この雑誌を初めて見る人にも、日本語を見知らない人にも雑誌の内容が視覚関係の雑誌であることを視認しやすいように配慮したデザインとすること、5) 手元にとってみると、図像はむしろ明確でなくなり、その代り VISION と The Journal of ..... の文字が明確となり、その雑誌が持つ意味と発行所を明

確に認識することができるようにする、6) スッキリしたデザインにしてみたい、というようなことでした。このことを実現する為に最初に手がけたのは題字の書体をどのような種類のものにするかということでした。図1に示したのは、作成の過程で実際に印字してみた何種類かの書体のサンプルの一部です。全体では80種類以上の書体について検討してみました。この時考慮したのは、1) 第8巻まで使用されていた字体を引き継ぐことで雑誌の継続性を重視させるか、あるいは2) 全く新しい書体を使用することで新鮮な印象を確保するかという二種類の考え方でした。こ



図1 書体サンプル

の段階ではどちらの考えを取るかということについて確信は得られていませんでした。その理由は、表紙全体のデザインをどのようにするかということで、題字の書体はどのようにしても変える可能性のあることが容易に予想できたからです。実物大に印刷してみることで、どの書体がエレガントか、どの書体が重厚か、あるいはどのような書体が軽薄な印象を与えるかについて大体の雰囲気は掴めたと思います。この作業の後には<スッキリしたデザイン>を実現する為には余り肉太の書体は使用しない方がよいという考えに傾き、これまで使用されていたものと同種類の書体は多分使用しない方がよいのではないかという微かな決断らしきものが出来ていた記憶があります。それは結局、全く白紙の状態の考え方で全体の構成に望んで行こうという気分を濃厚にさせたようです。

### 3. メインの図柄

表紙のデザインの主題を決定する為には、ひとつの基準、あるいは枠組みを設けることが必要でした。その枠組みというのは<表紙



図2 写真の原板

を一目見た時にこの雑誌が「視覚」に深く関係する内容であることを明確に表現しなければならない」という考えでした。このことを実現するには幾つかのストラテジがあったと思います。例えば、1) 学会の<紋章>等があればそれを使用するか、あるいは今回のように2) <眼>をデザイン化して直接的な表現にするとか、あるいは最近の学会誌で流行しているように、3) 毎号雑誌の内容に関連したデータや写真、あるいは図版を差し替えながら進行させて行くとか、そのように幾つかの方法があったと思います。今回はかなり保守的な二番目の方法を選択しました。

この考えを実現させる為には、私は最初から<ヒト>の<眼>をデザイン化したいと考えていました。その為の材料のハンティングが必要でした。手書きにする方法も無かった訳ではないのですが、ここでは写真で実物を撮影してみて、それでうまく行かなければ、その時には別の方法を考えることに決めていました。撮影に当たっては、マイクロ・ニッコールの 105 mm を使用することで被写体とある程度のワーキングディスタンスを保ち、相手にプレッシャーを与えないことが大変重要でした。撮影したフィルムは 200 枚程度でしたが、今回使用したフレームが最も良く自

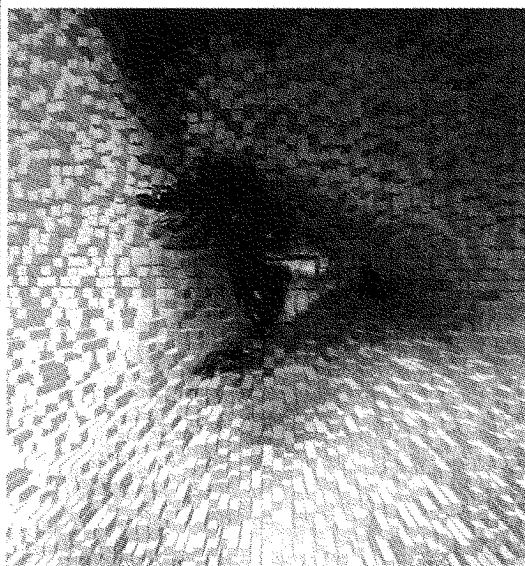


図3 良くない例

分の意図を表現していたと思います。因みに研究所内の数人のお嬢さんに無理を言って被写体になっていただきましたが、今回採用したフレームは服部さんという若いお嬢さんの眼を真横から撮影したショットでした。もうすぐ結婚されるそうですが、まだご主人がいない間に良いショットが撮れたのでよかったですと思っています。鶴飼先生が「何故このデザインの被写体が女性だとわかるのか？」という疑問をあげておられました。私にもその質問に答えることはできません。しかし、このように睫が長い美しい眼を持った男性も世の中に存在する可能性はかなり高いようにも

思えますがいかがでしょうか。図2で写真の原版を示します。

次にこの撮影された材料をどのようにデザインするかという作業でしたが、市販のレタッチ系のアプリケーションには、様々な変換を可能にする自由度が高いものはいくらでもあり作業には不自由しませんでした。デザイン化するにあたって留意したことは、出来る限り画像データを集約化して単純化を図ること、奇矯なデフォルメーションを避けること、飽きが来ないようにデザインをすること等でした。図3では最も良くないデザインの一例を示します。この例では、奇抜な処理は



図4 初期のデザイン例

かりが目立って、被写体の美しさとか公共的なデザインとしての優美さなどは微塵も感じられません。作業の最初に破棄した案です。図4では、ごく初期のデザインの例を示しま

す。ここではすでにカラー・ハーフトーン処理を行なっていますが、ピクセルの傾斜角が画面の枠に対して平行になっており、余り面白味がありません。また、オリジナル画像の

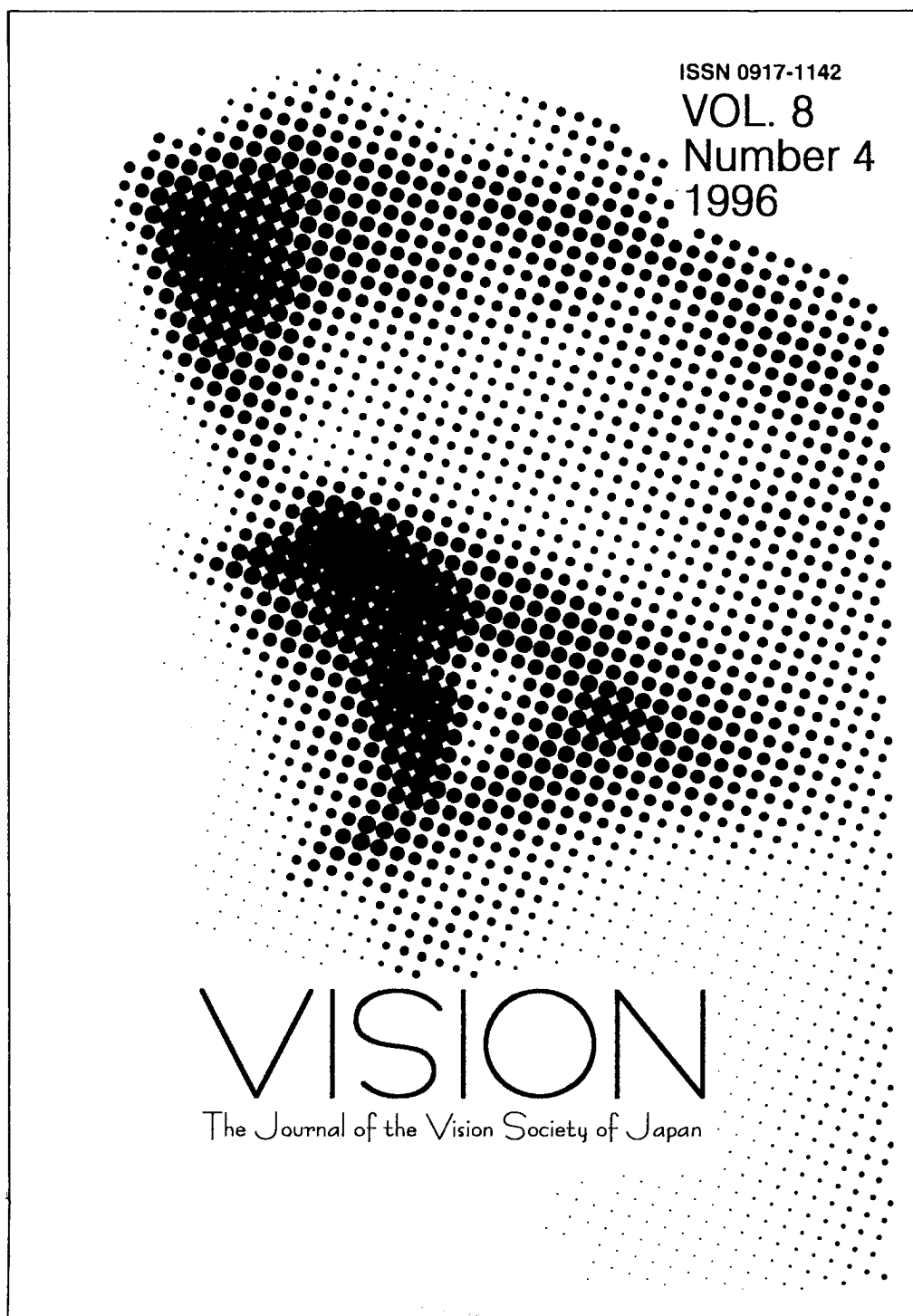


図5 完成直前のデザイン

明度差のレンジが狭いせいか全体にメリハリがないように見えます。題字もはめ込んでみましたが、これも私の意図とは程遠い結果となっていました。どことなく無機的で機械を見ているような気分になります。

その後原画の明度差を強調し、不必要な部分を切り捨て、題字の書体を決定し、更に巻号、年号、ISSN 番号等を配置し、一応のレイアウトを完成させたものを図5に示します。採用した書体は Bernhard Fashion BT というタイプフェイスでした。全体を英語のみでデザインしたので日本の学術雑誌のように見えなくなってしまうりましたが、それは最初に述べたように日本語を知らない人にもこの雑誌が視覚関連の雑誌であることが容易に理解できることを目的とした結果です。研究の国際化を目的のひとつとするなら、そのようなスタンスは是非共に必要であるという独断的な考えから出たものですが、特に今更外国にかぶれている訳ではありません。

採用された後で、鶴飼先生と相談しながら

決定稿を作成しましたが、この過程では鶴飼先生に大変お手数をおかけすることになってしまいました。図5のオリジナルの版と、現行の表紙デザインとは少し異なったところがありますがおわかりいただけるでしょうか。最後の段階では、私の方で作成した版下原稿の出力にやや明瞭さを欠くところがありましたが、鶴飼先生の方でファイルをB/Wモードに変換（2値化）していただいた結果、極めてクリアーな版下出力を得ることが可能になりました。

最後に、この表紙のデザインを提出した際の製作意図を考えてみた時、果たしてその意図が十分に発揮できたかということについては、いかほどの自信も無いのですが、表紙デザインの募集が再度あれば性懲りもなく次のバージョンをつくって再び応募するような気がします。何故ならこのような作業は、私にとって日常の雑務や原稿書きから逃避するには最適な仕事だからです。